

私たち大人の責任が今、問われている

2013 年初夏

北海道で長年農家を営んできた伯父は、東京で10年ほど金融機関に勤めてきた私に向けて、病床の中からおもむろに封筒を手渡し「この封筒には一万円札が入っているよ。成憲くんが東京の大きなビルの中でお金を動かして大きなお金を稼いでいることは凄く立派なことだと思うし、とても誇らしく思っているよ。だけど、一つだけ忘れて欲しくないことがあるんだ。同じ一万円を手に入れるために田舎で毎日泥にまみれて一生懸命働いている人たちが沢山いるんだ。決してそれだけは忘れないで大事にその一万円を使ってくれよ」不治の病に冒され余命数か月と宣告された伯父から、涙を流しながら受け取ったその薄い封筒は手に取った瞬間にドンと重みを増し、私にとっては一億円の価値があるように感じられました。

あれから8年。

2013年4月に短期戦を志向して始まった中央銀行による史上空前の金融緩和政策は、泥沼の様相を呈し未だに出口が見えず、膨張するマネーは株式市場に流れこみ、私たちの生活の実感からは離れていくばかり。コロナ対策の名の下、世界各国で繰り広げられた財政出動によるマネーのバラマキは、スマホ片手に株式市場でマネーゲームに興じる人を増やし、人々の労働意欲を削ぐばかり。

実体経済の中で、泥にまみれ汗を流して誰かのために働いて手に入れる一万円。

金融経済の中で、少しの間スマホをさわって誰かから奪って手に入れる一万円。

どこがおかしくないか？

誰かのために真面目に働いて手に入れる一万円と、誰かから奪って手に入れる一万円が同じ価値だなんて。同じ一万円なのに、その価値はどんどん乖離し揺らいでいる。こんなじゃ真面目に働くのがバカみたいだ。

だけど、立ち止まらなくてはいけない。

真面目に働く人たちがバカを見る世の中って、本当に幸せな世の中なのか？

私たちの背中をみて、私たちの子や孫たちは育っていく。

子や孫たちのために、真面目に働く人々が報われ続ける世の中を残していくことは、私たち大人の責任のうちの一つのはずだ。膨張する金融経済を前に今、大人である私たち一人ひとりの責任が問われている。

私は、真面目に働く人たちがバカを見る世の中にはしたくない。

だから私は行動し続ける。

カネに狂った人々で溢れかえる未来が実現しないようにするために。

取締役直販部長

水上 成憲



さわかみ投信株式会社

<https://www.sawakami.co.jp/>